

抽象的人間労働の特殊歴史的性格について

— 頭川氏における生きた労働と抽象的人間労働 —

第一節 問題の所在——超歴史説と歴史説——

従来より価値論上の主要問題たる抽象的人間労働の性格を巡ってはこれを歴史的范围と把握するか、超歴史的范围と把握するかは膨大な研究史が示すとおり重要な係争点をなしてきた。

本稿で主たる対象とする頭川氏の価値論は、価値実体たる抽象的人間労働は異種の使用価値の交換関係からのみ析出されることを力説し、もってかかる範囲の特殊歴史性を強調する点に特質がある。われわれもまた抽象的人間労働の特殊歴史的性格を氏にもまして主張したい。

では、なぜ特殊歴史説が理論的正当性をもつのかとい

小 島 彰

うことについて超歴史の見解と対比させつつみておこう。抽象的人間労働範囲の超歴史の見解は見田氏に代表されるごとく、抽象的人間労働そのものを「永遠の一面」(見田石介著作集第四卷) 大月書店、一九七七年、九四頁)と把握し、ゆえにかの労働と価値とは内的必然の関連を欠くことになる。まさに「価値に移行する必然性をもつものではない」(同上、九五頁)ということに帰着する。さらに、「抽象的労働というそれ自身としては生理学的な事実、たんなる自然的事実が、ここでは一つの社会関係をあらわすもの、一つの社会的実体となる」(同上、九六頁)と述べている。このように見田氏の場合に注目すべきことは、抽象的人間労働は超歴史

的・自然的事実であり、価値は社会的・歴史的形態である
と把握され、完全に両者の関連は切斷されているとい
うことである。

しかしながら、強調されなければならないことは、マ
ルクス自身は価値と抽象的労働との関係を常に内在的関
係に立つものと理解しているということである。例えば、
リカードを批判する際「交換価値をつくりだすものとし
ての、または交換価値であらわされるものとしての、勞
働の特殊な規定」(MWII一六一)を、リカードが研究し
ていないことを論難していることはその一証左である。

少なくとも労働と価値の両者の関連を断ち切って論じた
文言を文献史的にもマルクスから見いだすことはできな
い。両者の内的関連を追究しなかったのはむしろ古典派
の立場であり、ゆえに抽象的人間労働の超歴史的把握は
この古典派と一脈通じるものがある。

第二に、われわれが抽象的人間労働の歴史的な理解を強
く主張するのは、価値実体の析出方法そのものに根拠を
置くからである。なによりも現行『資本論』の商品論初
頭の価値実体導出プロセスは二種類の使用価値が交換関
係に立つことを根本的前提としてなされていることに留

意しなければならない。したがって、最初から生きた勞
働が交換の媒介を経ずしてそのままの形態で相互に比較
計量されるのではない。相異なる具体的有用労働が市場
において物的形態で等置される関係行為そのものが抽象
的人間労働析出の方法的手続きをなすのである。頭川氏
が鋭く指摘したように、「抽象的人間労働は使用価値に
結実する具体的有用労働ともとも別個に存在するので
はなく、市場で相対する異質な具体的有用労働から両者
がもつ異なる具体的有用的形態が客観的に捨象されるか
ぎりでのみ成り立つ」(『価値論と価値形成労働』『経済』
二四三号、一九八四年七月号、一九一頁)といえよう。

第三の超歴史説批判の有力な論拠は、前商品生産社会
においては具体的有用労働がそのままの形態で社会的勞
働として通用するということであり、抽象的人間労働へ
の還元そのものがかかる社会体制では意味をなさないの
である。他方、商品生産社会では社会的労働が特殊に抽
象的人間労働という形態をとらざるをえないのであり、
それは私的労働と社会的労働との矛盾に根拠をもつと思
われる。

以上のような欠点をもつ超歴史的見解に対して、歴史

説は商品論の価値実体導出過程に内在していると同時に抽象的人間労働と価値、さらに貨幣生成までの内的必然的関連を包括して展開できるといえる。頭川氏の価値論に顕著にみられるように歴史説にも弱点がないわけではない。それがもっとも明瞭に識別できるのは商品論の次元を越えたところでの労働の二重性をいかに考えるか、ということにある。氏は生産過程論における生産手段の価値移転と新価値創造に関して次のように明言している。

すなわち、「生きた具体的有用労働は旧価値を維持すると同時に新価値を付加するのであるが、このような具体的な有用労働の二面的作用は具体的有用労働が唯一の超歴史的な現実的労働であり従ってまた価値実体をなす抽象的人間労働の母胎であるというマルクスの二重的労働に関する分析から生じる必然的帰結にはかならない」（『古典派の価値概念とマルクスの価値概念』『高知大学学術研究報告』第二九巻、一九八〇年、二二頁）という。この見解は生きた労働Ⅱ具体的有用労働Ⅱ現実的労働という立場から、その具体的有用労働が旧価値移転と新価値創造を同時に行うことをもって「二面的作用」と規定する。しかし、それは明らかに『資本論』第六章「不変資

本と可変資本」の規定から逸脱した規定であり、氏独自のものである。なぜならば、当該箇所では労働の「一般的・抽象的性質において」（KI—二一六）新価値を付け加え、その具体的特殊な有用な性質において」（同上）生産手段の価値を生産物に移すことが確言されている。これこそが「労働の二面的な性格から生ずる同じ労働の二面的作用」（同上）といえる。

このような弱点を歴史説の有力な見解をなす頭川氏の価値論がもつのに対して、抽象的人間労働の超歴史的把握はそもそも生きた労働が抽象的人間労働を本来的属性として含むということと都合よく処理されることもまた確かである。実際、抽象的人間労働の超歴史的把握が今なお有力な見解として生命力を保持しているのはこのような事情のためであろう。われわれは頭川氏の歴史説と基本的に立場を同じくしつつも先のような『資本論』との不整合を解決しなければならぬ。それは根本的には商品で表される労働の二重性を生産過程まで遡及させることによってなしうると考える。事前的に生きた労働が抽象的人間労働を内包するという所論は誤りである。だが、労働生産物が生産過程を出て交換過程にはいること

を前提すればそこには二重の形態で労働が実在するわけだから、それを事後的に生産過程までフィードバックさせて抽象の一般的性質と具体的有用の性質を生きた労働があわせ持つと規定することは妥当であると思われる。そして、かかる方法こそマルクス『資本論』を体系的に貫く、経済学理解にとって決定的に重要な労働の二重性の視角であるといえよう。以下、第二節では抽象の人間労働の成立について考察し、かかる労働はどこに実在するかを明らかにする。また、第三節では生きた労働と抽象の人間労働との相互の関連について論及する。そして第四節は結びとしたい。

(1) 頭川氏と類似の見解としては次の論稿を参照、正木八郎「商品論と抽象の人間労働」(『現代思想』第三卷第一三号、青土社、一九七五年)。廣松渉「商品世界の物象的存立と商品物神」(同氏編著『資本論を物象化論を視軸にして読む』岩波書店、一九八六年)。なお古くは、イー・ルービン「マルクスの体系における抽象の労働と価値」(『経済学の根本問題——マルクス主義経済学方法論の諸問題——』河野重弘訳、共生閣版、一九三二年)。

(2) 超歴史的見解は見田氏のはかには吉原泰助「労働の二重性」(『マルクス経済学体系Ⅰ』有斐閣、一九七四年)。同氏「生産関係分析としての商品論」(『講座資本論の研究』

第二巻、青木書店、一九八〇年)。後者の論稿における「抽象の人間労働」という属性における人間労働の把握なしには、社会主義的計画経済は成り立たない」(同上、四一頁)という指摘は無視しえぬ重みをもつと思われる。

(3) 古典派の価値概念が商品生産の歴史的品格を認識しえずに抽象の人間労働の超歴史的把握にとどまっていたため、価値規定から価値形態を一貫して展開できなかったという事情に関しては頭川氏の次の論稿に詳しい。前掲「古典派の価値概念とマルクスの価値概念」。

* 『資本論』・『剰余価値学説史』・『マルクス・エンゲルス全集』からの引用は、(K I二四)・(M W II四五)・(M E W一六巻、六二)のようにそれぞれ原典頁のみ略記、なお引用にあたって強調点は、原典の場合には●●●、筆者の場合には○○○とする。

第二節 抽象の人間労働の成立について

本節ではまず第一に、マルクスによる価値実体導出のプロセスを検討し、それが現実的抽象を基礎にした思惟に基づく抽象であることを考察する。第二には、抽象的人間労働の実在性は諸商品の交換過程の産物である旨を究明する。

マルクスは資本制生産社会にあって絶えず繰り返され

ている無数の商品交換のうちから任意の商品を取り出して次のようにいう。「商品は、まず第一に、その諸屬性によってなんらかの種類の人間の欲求を満たす一つの物、一つの外的対象、である」(K I 四九)。このように商品の二要因の分析はまず使用価値から始まっている。

ついで、交換価値は以下のように規定される。「さしあたり、一つの種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係、すなわち比率として現れる」(同上)。さしあたって交換価値は、第一次的にある使用価値と他の使用価値との量的交換割合として規定される。

だが、ここで注意しなければならないことは、交換価値とは価値の現象形態と同義であるという点である。つまり、第一節の価値実体析出の根本前提たる二商品の交換関係それ自身が、一面で価値抽象の成立要件をなし、他面では価値の現象形態を包含していることである。その意味で商品論第一節と第三節価値形態論は相即不離の関係にある。しかし、マルクスは敢えてこの問題の検討に立ち入らず——それは第三節の価値形態論まで持ち越される——、価値実体の析出に向かうのである。そして、ある商品が様々な比率で他の商品と交換される関係をや

り立ち入って考察し、次のような推論に到達する、すなわち、「同じ商品の妥当な諸交換価値は一つの等しいものを表現する」(K I 五一)。さらに、「交換価値は、一般にただ、それとは区別されるある内実の表現様式、『現象形態』でしかありえない」(同上)。

マルクスは、交換価値となって現象する「ある内実」(Gehalt)を探求すべく、1クォーターの小麦||aツェントナーの鉄という等式を例にとり、「この等式は何を意味するか？」(同上)と問う。そして、そこには「同じ大きさの一つの共通物が、二つの異なった物のなかに、すなわち1クォーターの小麦のなかにaツェントナーの鉄のなかにも、実存する……。したがって、両者は、それ自体としては一方でもなければ他方でもない第三のものに等しい」(同上)と答える。われわれは「一つの共通物」とか「ある第三のもの」が、価値あるいは抽象的人間労働であることを知っている。だとすれば、上の一文を素直に読むかぎり抽象的人間労働は小麦にも鉄にもあらかじめ実存しているように考えられるし、第三者とは使用価値としての小麦や鉄ではない別のものと理解できる。

ところで、マルクスは前述の「共通物」は商品の幾何学的・物理的・化学的屬性ではないという。諸商品の交換関係を明白に特徴づけるものはまさに諸商品の使用価値の捨象（K I 五二）であり、労働生産物の有用的性格及び労働の有用的性格を捨象してなお残るものは互いに無区別な「同じ人間労働、すなわち抽象的人間労働」（同上）であると論定する。また、支出の形態にかかわりのない人間的労働力の支出の単なる「凝固体」が価値であり、それは「まぼろしのような対象性」をもつものとして特徴づけられる。

このように価値実体の導出論理は、マルクスの思惟によって彼の頭脳の抽象力を駆使することで得られる、諸商品の「価値抽象」Ⅱ「人間的労働の単なる凝固体」（K I 六五）への還元である。このことは価値実体が異質な具体的有用労働の等置行為によって現実に生成することは次元の異なった論理なのである。つまり、交換関係に立つことそれ自身が抽象的人間労働の成立を意味するが、その成立そのものが第一節の価値実体析出過程で積極的に説明されているわけではないということである。価値実体を析出する際の方法的力点は「社会的生産過程

で日々行われている抽象」（MEW 一三巻、一八）を實際的な根拠にもつとしてもそのような現実的抽象ではなく、第三者による思惟的抽象だといえる。

この点に関してわれわれと頭川氏は若干の相違がある。氏は、抽象的人間労働が小麦Ⅱ鉄という等式を成立せしめる共通の第三者だということは、抽象的人間労働が小麦にも鉄にもあらかじめ具体的有用労働とともに物質化されているのではないということと同義である」（前掲「価値論と価値形成労働」一九二頁）と述べている。けれども、「同じ大きさの一つの共通物が、二つの異なった物のなかに、すなわち1クォーターの小麦のなかにもaツェントナーの鉄のなかにも、実存する」旨が明確に指摘されている以上、氏の議論には賛成しがたいのである。労働生産物が即自的に抽象的人間労働と具体的有用労働の双方を包含するとはいえないにしても、労働生産物が交換関係に置かれた場合はそこには既に価値的同等性が成立していると思われる。論点をよりクリアに抽出するために頭川氏の次の一文を引用しておこう。「マルクスによる価値実体の抽出方法の特色は、抽象的人間労働を市場で相対する種類を異にする使用価値同士の交

換関係のうちに抽象することと抽象的人間労働を相異なる具体的有用労働からその異質な具体的有用属性を捨象して抽出する二つの手続きにある」(前掲「価値論と価値形成労働」一九二頁)という。ここで問題となるのは、だれが「相異なる具体的有用労働からその異質な具体的有用属性を捨象して抽出」するのかということである。それはマルクスを置いてほかにありえない。異種の使用価値それ自身が価値抽象を行う論理は、第三節の価値形態論や物神性論で初めて説かれるのである。

では、思惟的抽象としての価値実体の析出を根底から支える「社会的生産過程で日々行われている抽象」とはなにか、これについて闡説しておこう。

われわれは抽象的人間労働が諸商品の交換関係を欠いては成立しえないことを強調してきたし、その意味では歴史説の立場に立っている。抽象的人間労働がいわゆる「社会的実体」である所以は、その労働が自己を語りうるのが諸商品の交換という社会的交換の場面においてほかにありえないからである。すなわち、「生産者たちは彼らの労働生産物の交換を通して初めて社会的接触にはいるから、彼らの私的諸労働の独特な社会的性格もまた

この交換の内部ではじめて現れる」(K I 八七)からである。あるいは「労働生産物は、それらの交換の内部ではじめて、それらの互いに感性的に異なる使用対象性から分離された、社会的に同等な、価値対象性を受け取る」(同上)。したがって、交換の内部で初めて価値対象性を受け取る⁽³⁾ということは、生きた労働の次元で人間的労働力の支出としての同等性を獲得するのではないことを意味する。さらに、交換こそが、社会的労働編成が私的諸労働の個々の諸環によって物象的に担われる社会的生産関係創出において基軸的意義をもつ。つまり、「諸商品の交換は、社会的物質代謝、すなわち私的な諸個人の特殊な生産物の交換が、同時に諸個人がこの物質代謝のなかで結ぶ一定の社会的諸生産関係の創出でもある過程である」(MEW 一三巻、三七)。

以上のように、価値実体の析出方法は交換関係において「社会的生産過程で日々行われている抽象」を基礎にもつとしても、それが明示的に語られているのではなく、マルクス自身による価値抽象への還元であることを論及した。さらに、抽象的人間労働そのものは交換過程の所産であり、その意味では商品生産に固有な特殊歴史的范围

嚙であることを明らかにした。

(1) 冒頭商品は資本制的商品であり、歴史上の単純商品ではない。ただし、歴史上の単純商品にも基本的に共通する性格をもつことまでも否定はしないが、資本制的商品とはいっても資本の形態規定(剰余価値)を捨象した商品であり、 $W:W'$ からの抽象である。マルクスの視座は多様な色彩を持つ複雑な資本制生産社会を商品生産関係でもって輪切りしてみたものであり、『資本論』第一篇はかかる意味でモノクロの世界であるう。

(2) 拙稿「相対的価値形態の内実の論理構造——久留間『回り道』説の批判的検討——」『一橋論叢』第九六巻第五号、一九八六年)において、「内実」の項第五段落の「回り道」論が商品自身の論理に基づいた現実的還元であることを言及した。

(3) 廣松氏も「生産物は、マルクスが言うように、『交換の内部において初めて社会的に同等な価値対象性を受け取る』のであって、それ以前には、従って、直接的生産の現場的帰結では、生産物はたかだか可能態の相でしか価値対象性をもっていない」(前掲「商品世界の物象的存立と商品物神」五六頁)ことを論じている。厳密に言えば、生産過程のレベルでは本来的に商品・価値・抽象的人間労働はすべて実存せず、「反照」規定としてしかいえないということであるう。

第三節 生きた労働と抽象的人間労働との関連

既に検討したように頭川氏の所説は、抽象的人間労働の析出を異種の使用価値の交換関係に求める点に独自性をもつ。われわれもまたこのことを否定するつもりは全くない。ところで、かかる市場での交換関係を離れた場面、つまり交換に先立つ生産過程における生きた労働と抽象的人間労働とはいかなる関連に立つのか、という問題が残されている。

そこでまず第一に、頭川氏はこの問題をどのように考えているのかを考察し、第二に、『資本論』生産過程論における労働の二重性の諸規定と氏の見解との整合性を検討し、われわれの見解を述べておきたい。

氏は先に考察したように抽象的人間労働の成立は異種の使用価値の市場における交換関係をその決定的要件とすることを力説する。したがって、極論すれば生産過程及び生きた労働の次元では抽象的人間労働範疇はそもそも成立の余地がないということになるう。実際、「ある種類の使用価値が別の使用価値と市場で交換されず交換価値が成立しない部面——具体的には生産過程——で

は抽象的人間労働成立の根本前提を欠く」(前掲「価値論と価値形成労働」一九一頁)と断言している。⁽¹⁾

そして、このような視角から頭川氏はマルクスと古典派との価値論上の差異、さらに、サービス労働⁽²⁾と価値形成説への批判についても言及するのである。例えば、「頭川のなかだけでの観念的な抽象によって生きた具体的有用労働から抽象的人間労働を析出しようとするところみる恣意的な考え方は古典派の方法そのものをなし、マルクスに固有な方法と理論上天地の隔たりをもつ」(同上、二〇三頁)。あるいは、「サービス労働⁽²⁾と価値形成労働説の最大の欠陥は、価値実体たる抽象的人間労働をもって生きた労働と同時平行的に支出さうれる超歴史的な労働の形態とみなす根本前提そのものにある」(同上、二〇二頁)。

ここから彼の考え方が生産過程で支出される生きた労働は具体的有用労働でしかありえないことが明瞭に読み取れよう。逆にいうと、労働の二重性⁽³⁾は異質な具体的有用労働が物的形態で等置される交換場面においてのみ語りうるということになり、氏の主張は論理的に首尾一貫していると思われる。また、かかる立場からの生きた労働

働が本来的に抽象的人間労働を含むという超歴史説への批判も筋が通っているようにみえる。

ところが、マルクスによる労働の二重性の別扶の意義は商品論の次元のみに限定されているわけではない。率直に言うと、頭川氏の論旨には『資本論』でいうところの価値移転と価値付加を具体的有用労働の二重的作用ととらえる無理な主張が見いだされる。

われわれは生産過程における労働の二重性の視点をここに改めて検討する必要がある。まず第一に、『資本論』第五章「労働過程と価値増殖過程」では商品の二要因に対応する商品の生産過程の二面性の指摘がある。すなわち、「商品そのものが使用価値と価値との統一であるように、商品の生産過程も労働過程と価値形成過程との統一でなければならないのである」(K I 二〇一)。さらに、価値次元から労働次元にさかのぼっていうと、「要するに、前には商品の分析から得られた、使用価値をつくるかぎりでの労働と価値をつくるかぎりでの同じ労働との相違が、今では生産過程の違った面の区別として示されているのである」(同上、二一一)。

マルクスは商品の分析から得られた結論としての労働

の二重性を意識的に商品の生産過程に適應して労働過程と価値形成過程の二面性を指摘し、さらに商品生産の資本主義的形態は労働過程と価値増殖過程の統一であるとを論定している。

また第二に、「第六章 不変資本と可変資本」では一層明確な論述がみられる。マルクスは紡績工を例に挙げて次のように述べている。すなわち、「彼の労働は、一方の屬性では価値を創造し、他方の屬性では価値を保存する」(KI二一四)。頭川氏はこの点を以下のように解釈する。「唯一の現実的労働としての具体的有用労働は、一方で死んだ具体的有用労働を合目的に消費することと旧価値を保存し、他方でそれ自身が対象化されることで新価値を付加する」(前掲「古典派の価値概念とマルクスの価値概念」二二頁)という。問題は上の引用文中の「彼の労働」をいかなる労働と考えるのかにある。氏の見解は、「実在的労働は具体的有用労働の形態以外にありえない」(「価値論の基本問題」『一橋論叢』第八一卷第六号、一九七九年、七六頁)と論定し、そこから価値移転も価値付加も具体的有用労働の作用として説明することに特徴をもつ。

しかしながら、『資本論』の叙述を正確に理解しようとすれば氏の所説には重大な難点が見いだされる。以下にその箇所を引用しておこう。「その抽象的な一般的な性質において、人間労働力の支出として、紡績工の労働は、綿花や紡錘の価値に新価値を付け加えるのであり、そして、紡績過程としてのその具体的な特殊な有用な性質において、それはこれらの生産手段の価値を生産物に移し、こうしてそれらの価値を生産物のうちに保存するのである」(KI二一五)。このように紡績工の労働は「その抽象的な一般的な性質において」⁽¹⁾価値を付け加え、同時にその具体的な特殊な有用な性質において「価値移転を行うのである。したがって、「生きた具体的有用労働は旧価値を維持すると同時に新価値を付加する」(前掲「古典派の価値概念とマルクスの価値概念」二二頁)とはいえないのである。

では、なにゆえに頭川氏はいかなる無理な解釈をあえて試みたのであろうか。氏は生きた労働が本来的に抽象的人間労働を含むと規定すれば、それはつまるところ抽象的人間労働Ⅱ超歴史説にいきつくという危惧をもっている。それゆえに、あたかも生きた労働が抽象的一般的

性質と具体的有用的性質の二側面を内在的にもっているかのような『資本論』の論述をあえて拒否し、価値付加と価値移転を具体的有用労働の二面的作用として説いたのであろう。そして、氏の見解の主要な論拠は次の一文にある、「価値を付け加えながら価値を保存する」ということは、活動している労働力の、生きている労働の、一つの天資なのである」(KI二二一)。ここから生きた労働具体的有用労働という図式から具体的有用労働の二面的作用としての価値付加と価値移転が導出されてくる。

生きた労働が内在的に抽象の人間労働を含むという超歴史説は確かに誤謬であるが、マルクスは前述の箇所ですきた労働が本来的に両面をもつかのように述べているのであり、それは否定できないことである。端的にいうとマルクスは、商品論の分析で得られた労働の二重性を生産過程の生きた労働にフィードバックさせていると思われる。だから、事前的に生きた労働が二側面をもつと規定するのは誤りである。だが、生産過程からでてくる労働生産物が商品として交換されることが予定されている以上、その生産過程での生きた労働は二面的作用を果たしているということを事後的に論定する仕方は論理的

にみて妥当な方法である。そして、かかる方法的処理は『資本論』全体を貫くものである。なぜならば、技術的構成に基づく資本の有機的構成の措定や社会的総生産物の価値視点・素材視点からする三価値構成・二部門分割など労働の二重性の視角なくして到底論じられるものではない。まさに「経済学の理解にとって決定的跳躍点」(KI五六)をなす枢軸概念である。

(1) 頭川氏は、「価値概念と価値形態」(『高知論叢』第八号、一九七九年)において「ある商品に体化された潜在的な抽象の人間労働が顕在化する」(同上、二五頁)というように「潜在的」なる言い回しを多用している——他の論稿ではほとんどないが——が、かかる規定と抽象の人間労働が異種の使用価値の相互関係のうちのみまさに関係概念としてしか成立しないという規定とはいかに整合するか、いままじ説明を要するのではないだろうか。

(2) 超歴史説を採る宇野氏の見解については次のようにふれている、「宇野弘藏氏の主張の根本的欠陥は、生産過程で支出される生きた労働がそれ自体としては具体的有用労働でしかないのに誤って超歴史的に抽象の人間労働という一面をもつとみえず取り違えにある」(前掲「価値論と価値形成労働」一九四頁)。

(3) 頭川氏は労働の二重性が立体的に関係において成立す

るのは市場での交換関係であることを以下のように力説している。すなわち、「マルクスによって発見された二重の形態にある労働の分析の真骨頂は、私的労働の形態たる相異なる具体的有用労働が凝固状態において市場で相対する等置関係の基底においてのみ社会的労働の独自の形態たる抽象的労働が成り立つ具体的有用労働と抽象的労働との立体的関連の明確化」（『価値形成労働の概念』『一橋論叢』第八四巻第二号、一九八〇年、八三頁）にあるという。

(4) 前掲廣松編著の第三講「貨幣の資本への転化と剰余価値の生産」（吉田憲夫執筆）では、「ここに言う『価値の源泉』としての『抽象的・社会的な労働一般』は、労働の二重性論における『抽象的労働』という規定とそのまま合致するわけではない」（同上、一八八頁）とし、『抽象的・社会的な労働一般』は、『生きている労働』Ⅱ『労働そのもの』の性質であるのにならして、『抽象的労働』は、あくまで『商品に現示される労働』の性質ではない（同上）という。われわれと基本的方向において同一性をもつと思われる。

第四節 結びにかえて

われわれは抽象的労働を頭川氏とともに市場で相対する異種の使用価値から具体的有用の性格を捨象して

初めて析出できる範疇であると論じてきた。したがってまた、かかる範疇は生きた労働そのものに本来的に内包されているものではなく、交換関係において物的に等置されることで初めて成立する範疇だと規定しよう。その意味では歴史貫通的に実在する範疇ではなく、商品交換の広がりとともに自己を主張する特殊歴史的な範疇であるといえる。まさしく交換過程の所産であるといっよういだろう。

また、商品論第一節の価値実体の析出過程は、抽象的労働が交換関係で現実的に成立することそれ自体を積極的に論じたものではなく——もちろん交換過程で実際的にも抽象的労働が成り立たなければ次の思维的な抽象も成り立たないのだが——、マルクスという第三者による思维的な抽象的労働の抽出であることを考察した。

ところで、頭川氏は市場での異種使用価値の相対する等置関係こそが二重の形態にある労働の唯一の成立面であることをあまりにリジットにとらえるために、資本主義的商品の生産過程における生きた労働の二つの作用——抽象的一般的な性質と具体的有用の性質——まで

も否定してしまう無理な解釈を施すに至った。念のためにいうと、われわれは無条件に生きた労働が二重性をもつと主張しているのではない。それは最終的には超歴史の見解に帰着するだろう。そうではなく、商品論の領域で得られたいわゆる商品に表されるかぎりでの労働の二重性を前提してこれを生産過程のレベルまでフィードバックさせて規定しているのである。換言すれば、結果的には商品として交換過程にはいる労働生産物とその交換部面での労働の二重的形態を有する至るのだから、これ

を逆に生産過程まで遡及してみればあたかも生きた労働が生産手段の価値移転と新価値創造の二作用を果たしているようにみえるということである。マルクスの方法はこのような前提の上に立脚しているとわれわれは考える。もし交換部面以外でいかなる意味でも抽象的人間労働や価値について語りえないということになれば、『資本論』そのものの理解が根本から不可能となりはしないか、という危惧を抱かざるをえない。

(一橋大学助手)